

アイネイアースのトロイア逃亡図と 『パーレー氏萬國史』

水谷 智洋

私が通った郷里の高校では、図書室が任期 3 年の図書部員によって運営されていました。任期 3 年ということは、一度、委員になってしまえば、途中でクラス替えがあろうとなかろうと、卒業までずっとその任にあるという意味です。これを知った私は、一年次の初めのクラス会で、勇躍、図書委員に立候補し、ものずきな対抗馬が出る筈もなく、首尾よく目的をはたしました。それからというもの、私は、当番の曜日、時間等にかかわらず、委員の詰める部室に入りびたりとなって、気随気ままに本を借り出し、読みまくりました。その中には、当然のように、岩波文庫の『古代への情熱 — シュリーマン自伝 —』（村田数之亮訳、1954）もありました。この自伝に対して、まだギリシアへの思い入れも何もなかった高校生の私がどんな感想をもったかは、むろん、遠い記憶の外にあります。けれども、シュリーマンの場合、幼少時にトロイア戦争の伝説を語り聞かされたことが彼ののちの人生を決定づけたわけですから、はたから見ればどんなに取るに足りないようなことがらでも、子ども心には測り知れないほど大きな影響を及ぼすことがあり得るのだなあ、との感懐を抱いたであろうことは想像に難くありません。

その後、身のほど知らずにも西洋古典学なるものに志した私は、主要な関心を初期の叙事詩に置いたこともあって、一般の人よりは多めにトロイアやシュリーマンに注意を払っていました（と思います）が、1973年3月に朝日新聞社から刊行された白柳美彦『ホメロスの丘 — シュリーマン伝 —』を手にしたとき、同書6頁の「イェラー著『世界史』のトロヤ落城図」（図版1）に目が止まりました。なぜなら、岩波文庫の『自伝』には、この図版はなかったような気がしたからです。そこで早速、手許の文庫本で確かめてみますと、はたしてその通りでした。この図は私には初見だったのです。シュリーマンにも、むろん、そうでした。この間の経緯と、それを見たときの彼の反応を『自伝』に語

ってもらいましょう。

父はまたしばしば私にホメロスの英雄の働きやトロヤ戦役のできごとを歎美しながらものがたったが、その時にはいつも私はトロヤの事からの熱心な弁護者であった。私は父からトロヤはまったく破壊されて、跡方もなく地上から消えうせたことを悲しく聞いていた。しかし当時ようやく八歳の子供であった私に、父が1829年の降誕祭にゲオルク・ルドヴィヒ・イエッラー博士の『子供のための世界歴史』をくれたが、その書物に、燃えあがっているトロヤのさし絵があった。そこには巨大な城壁やスカイア門があり、父のアンキセスを背におい、幼いアスカニアの手を引いて逃げてゆくエネアスが描かれていた。このさし絵を見て、私は喜びにあふれて「お父さん、あなたは間違っていたよ、イエッラーはきっとトロヤを見たんだ。でなければ博士がここを描けなかったでしょう」と叫んだ。彼は「ねえおまえ、これはただの作り絵だよ」と答えた。しかし、それなら古代トロヤにはかつて実際にこの絵に描かれているような堅固な城壁があったのか、との私の質問にたいしては、彼はそうだと答えた。そこで私は「お父さん、もしその城壁が立っていたことがあるのなら、それが跡方もなくなるなんてことはない。きっと数百年間の石ころや塵の下にかくれているかもしれないでしょう」と言った。そのとき彼はもちろん反対したけれども、私が自分の考えをかたくとって動かないので、ついに私たちは、私が将来いつかはトロヤを発掘するということに意見が一致した。¹⁾

このアイネイアースたちのトロイヤ逃亡図こそ、シュリーマンをシュリーマンたらしめるに至った、いうなれば、運命的な図版だったわけですが、私などは、このどこにそれほどの迫力があるのかしらと訝る部類で、彼我の想像力の違いを痛感させられたものでした。²⁾

その後、かなりの歳月が過ぎてからのこと、私は松本清張の「恋情」という作品の中に、明治15年頃のある華族の家のできごとを描写する次の一節を見つけてきました。

ある時、己は学習中のPeer Parleyの万国史を携えて律子の部屋に行ったことがある。この教科書にはたくさんの挿絵があった。

律子はページをめくり、珍しそうに絵を見ていた。ときには、
「これ、何でございますの、お兄さま。」

と小指を絵のはしにのせてきた。トロイ戦争か何かの細密な銅版画をさした小指は透きとおるように白く…³⁾

ここで 'Peer Parley' とあるのが気がかりですが、もしこれが 'Peter Parley' の誤植であれば、それは *Peter Parley's Universal History* (New York, 1837) への言及に間違いはないでしょう。⁴⁾ わが国では、『景 萬國史』、『パーレー氏萬國史』などの名で通ったこの書物のことは、かねてより、木村毅『丸善外史』(丸善, 1969) や惣郷正明『古書散歩 — 文明開化の跡をたどって —』(朝日ブニングニュース社, 1979) などを通じて知っていましたが、まだ実物を見たことはなく、「トロイ戦争か何かの細密な銅版画」の正体も不明です。もしかしたら、アイネイアースたちのトロイア逃亡図も、その「たくさんな挿絵」の中にまじっているかもしれません。確かめてみたくなりました。

まずは手近なところからと、当時、勤めていた東大教養学部図書館の書庫にもぐりこみました。すると、あいにく原書はありませんでしたが、第一高等学校蔵書の中に、牧山耕平訳『景 萬國史 上巻・下巻』(文部省, 明治9 (1876)) を見つけることができました。⁵⁾ けれどもこの本には、地球儀を平面にしたような「東半球」(上巻 10 頁) と「西半球」(同 11 頁) の 2 枚の地図があるのみで、肝心の挿絵は皆無です。それに、私が期待を寄せたトロイア戦争に関する記述も実にあっさりしたもので、この分では、たとえ挿絵が多いという原書にあたることができたとしても、シュリーマンを興奮させたような銅版画は、まず見られそうにありません。こうして私の目論見は、あっさり、はずれに終わったのでした。

それからまた 10 年近く (たぶん) 経った今年 (2003 年) の暮れ、私はなにげなく、手近の *The Oxford Companion to Classical Literature*, 2nd edition, ed. by M.C. Howatson, 1989 のカバーのカラー写真に目をやりました。するとそれはアイネイアースのトロイア逃亡図 (図版 2) だったのです。説明によれば、作者は F. Barocci (c. 1535-1612)、シュリーマンが目にした銅版画より、はるかに劇的で迫力に富んだ絵画です。これを見て私は、これまで幾度となく手にしていながら、そのカバー写真にまったく気付かずにいた自らのうかつさ加減に呆れる一方で、まだ対面の榮に浴していない *Parley's Universal History* の原書のことを思い出しました。

こういうことは、思い立ったが吉日といえます。早速、今お世話になっている学習院大学の図書館に足を運び、司書の女性の協力を得て検索しますと、さすがは古い学校です、1872年版(1928年、山口弘達子爵より寄贈のスタンプあり)と1873年版が各1冊、1876年版が2冊と計4冊も所蔵されていました。いずれもB6版ほどの大きさで全700頁、子ども向けの本らしく、大きな活字で組んであります。そして標題紙には、書名の下に‘a new edition, brought down to the present day. illustrated by 20 maps and 125 engravings.’とあります。何年からnew editionになったのかは不明ですが、明治初期のわが国で利用されたのが1837年の初版本である筈はなく、清張作品に登場するのはこれらのnew editionの方に違いありません。⁶⁾そこで問題のengravingsですが、予想通り、トロイア戦争がらみのものはついに発見できませんでした。こうして私の期待はずれが最終的に確定したわけですが、こういうことになった理由を私なりに「推理」してみました。清張氏は、よく知られるように、綿密な取材と豊富な資料に基づいて執筆した人ですから、*Parley's Universal History*も原書が、あるいはわが国での翻刻版を実見していたに違いありません。⁷⁾ところで同書p.193, Chapter LIV. Beginning of the Theban War というところに槍や弓矢を持つ5人のギリシア兵を描いた銅版画がありますが、これが作家の記憶に残っていたため、「トロイ戦争か何かの細密な銅版画」という記述になった、けれども私の目は「トロイ戦争」の方だけに引きつけられ、結局は私のひとり相撲に終わった、こんなところが「真相」と思われます。

最後に、なにかのご参考までに、トロイア戦争に関する原書の記述(1872年版、pp.182-3)と牧山訳の該当箇所(上巻231-2頁)を引いておきます。明治初期の訳文とはこういうものだったのですね。

9. The Trojan war was still more famous than the expedition in search of the golden fleece. Troy was a large city on the Asiatic side of the Hellespont, which is now called the Dardanelles. Paris, the son of the Trojan king, had stolen away the wife of Menelaus, a Greek prince.

10. All the Grecian kings combined together to punish this offence. They sailed to Troy in twelve hundred vessels, and took the city after a siege of ten years. This event is supposed to have occurred eleven hundred and ninety-three years before the Christian era.

11. But most historians are of opinion that the Trojan war was a much

less important affair than Homer has represented it to be. Poets do not always tell the truth; and Homer was the father and chief of poets. He was a blind old man, and used to wander about the country, reciting his verses.

㊤ 多來ノ戦争ハ金羊探索ノ話ヨリモ更ニ高名ナル事件ナリ多來ハヘルレス ポンド海ニ沿ヒ亞細亞ノ地方ニ建テシ都府ナリ蓋シヘルレスポンドハ現今ノタルダ子ルスナリ其多來王ノ子パリス希臘ノ一邦國ノ君メ子ラウスノ妻ヲ偷ミテ去レリ

㊤ 因リテ希臘ノ君長擧テ一致シ其罪ヲ正サンカ爲メニ兵力ヲ戮セ千二百艘ヲ發シテ多來ニ航シ十年間之ヲ圍ミ然ル後其府ヲ取レリ是レ紀元一千百九十三年ノ事ナリ

㊤ 史家多ク論シテ曰クノ多來ノ戦争ハホームルカ述ヘシ如ク史中要領ノ事件ニハ非サルナリト夫レ詩人ハ當ニ眞誠ヲ語ラス即チホームルハ詩人ノ祖先ニシテ年老イ目盲ニ及テ詩句ヲ講シ希臘國ヲ遍歴シタル人ナリ

注

1) 引用は1976年の改訳版13頁より。『子供のための世界歴史』については、同書150頁に「(Weltgeschichte für Kinder, von Dr. Georg Ludwig Jerrer) 1828年ニュルンベルク刊」と注記されていますが、銅版画の作者については、『自伝』にも『ホメロスの丘』にも言及がありません。

2) ついでながら、私は、『ホメロスの丘』を読んだ年の夏に、初めてギリシアの地を踏み、トロイアにも足をのばしました。

3) 『清張短編全集 5』、光文社、1964、134頁(初出は雑誌「小説公園」1956年1月号)。

4) 『松本清張全集 35』、文藝春秋社、1972、260頁でも、'Peer Parley'のままです。なお、Peter Parleyとは、アメリカの出版業者で著述家でもあったSamuel G. Goodrich (1793-1860)の pseudonymです。The Encyclopedia Americana, 1963 edition, Vol.XIII, p.58のGoodrichの項を少し引用しておきます。'where (=in Boston) he established himself as one of the most successful publishers of children's books. His Peter Parley series, the first of which appeared in 1828, ran to some 116 volumes. Total sales eventually ran

into the millions. ... Some of the volumes were written by Goodrich himself, others by his staff. One at least of the series was written by Nathaniel Hawthorne, ...' また、同百科の Hawthorne (1804-64) の項 (Vol.XIV, p.11) には、こうあります。'For six months in 1836, Hawthorne lived in Boston, where he ... compiled *Peter Parley's Universal History* (1837) for children.'

5) のちに国立国会図書館で調べましたところ、約 20 種の翻訳本が同館に収蔵されていることが判明しました。牧山訳は、どうやら、最古のものようです。

6) 木村『丸善外史』99-101 頁によれば、東京の丸屋 (のちの丸善) からの注文があまりに多く寄せられるので、1874 年版からは Chapter XXXI. History of Japan の末尾 (p.113) に、'9. The Japanese seem to wish, too, to know something of the history of the nations from which they have so long lived apart. For every now and then, the publishers of this little book which you are now studying, receive an order from far off Japan for two, four, six hundred copies of Parley's Universal History.' という記事が付加された由ですが、その点を除けば、1872 年版と 1876 年版の内容は同一です。なお、この書を初めて日本にもたらしたのは福沢諭吉で、それは 1860 年版だったそうです。

7) 国立国会図書館には、12 種の翻刻版が収蔵されています。



図版1 イェラー著『世界史』のトロヤ落城図



図版2 F. Barocci, *Aeneas' Flight from Troy*